

雑誌『青い海』（1971-1985）の編集方針と思想的傾向 — 復帰期沖縄における地域メディアの自己定位と文化的再編 （『雑誌『青い海』を表象文化論から解く—Ⅱ』） —

Editorial Policy and Ideological Tendencies of the Magazine *Aoi Umi* (Blue Sea) (1971-1985): Understanding the Magazine 'Aoi Umi (Blue Sea)' from the Perspective of Artistic Representation Research-1, The Self-Positioning and Cultural Reconfiguration of a Regional Medium in Post-reversion Okinawa

豊見山 愛 TOMIYAMA Megumi

This paper examines the layout and editorial afterwords of the regional magazine *Aoi Umi* (Blue Sea) (1971-1985), published in Okinawa during the years surrounding reversion to Japan, in order to elucidate its editorial philosophy and ideological orientation. Conceived as a comprehensive local journal addressing Okinawan history, culture, and contemporary social issues, *Aoi Umi* positioned itself toward young readers and intellectuals at a moment of profound political and cultural transition.

A distinctive hallmark of the magazine was its postcolonial sensibility. This was evident in special issues devoted to Amami and Hokkaido, through which the editors articulated an understanding of Okinawa as situated on the “periphery” and imagined forms of horizontal solidarity with other marginalized regions. Confronting widespread anxieties about an emerging “ideological vacuum” after reversion, the magazine undertook a critical interrogation of institutional disorder and structural dependency, thereby extending its function beyond cultural journalism into the realm of social critique.

Equally significant were its efforts to restore cultural self-esteem destabilized by colonial value systems. Through the reexamination of historical figures and the reassessment of cultural resources—including Okinawan theater, folklore, and folk song—the magazine sought to reaffirm the dignity and complexity of local cultural traditions. Its special features on environmental degradation and political controversies, along with anonymous roundtable discussions, can be understood as deliberate strategies to foster public discourse under conditions where freedom of expression was constrained.

Taken as a whole, *Aoi Umi* served as a vital regional medium that encouraged the autonomous reconfiguration of local culture amid the rapid modernization and homogenization that followed reversion. It disseminated knowledge from the periphery while cultivating a shared sense of engagement with its readership.

序論 復帰期沖縄における地域メディアの再定位

1972 年の日本復帰前後、沖縄社会は政治・経済・文化のあらゆる領域で急激な変動に直面していた。アメリカ統治下で形成された制度や価値観が揺らぐ一方、「日本化」への急速な移行が進むなかで、地域社会は自らの歴史的位置と文化的主体性を根本から問い直すことを迫られていた。こうした転換期に創刊された雑誌『青い海』（1971-1985 年、全 145 号）は、若者や知識人層を主要読者とし、沖縄の歴史・文化・社会問題を多角的に扱う総合誌として独自の役割を担った。

著者による既存研究^{（注 1）}では、1971 年に大阪で創刊された『青い海』について、創刊者と作家・思想家・美術家らとの関係性に着目し、当時の沖縄出身者が大阪で直面した差別や劣等感を背景に、沖縄文化への誇りを喚起しようとする編集方針を明らかにしてきた。また、編集者や関係者の

注 1 豊見山愛「雑誌『青い海』を表象文化論から解く—Ⅰ」、『沖縄県立博物館・美術館 美術館研究紀要 第 13 号』、pp.33-45、2025 年 3 月 21 日。

ライフヒストリー、芸術活動の横断性を文献とインタビューから検討し、同誌が多様なジャンルを架橋しながら沖縄の歴史・伝統文化の再発見を志向していた点を指摘してきた。前稿で確認したように、『新沖縄文学』と『青い海』は、同じ〈沖縄〉を起点としながらも、異なる地平を切り拓いた二つの媒体であった。前者は「文学不毛」という自己規定を覆し、沖縄における思想と文学の基盤を築こうとする知的闘争の場であり、後者は歴史・民俗・芸能・美術といった生活文化の総体を包摂し、世代を超えた読者層を獲得しながら、沖縄の「生きられた文化」を可視化する場であった。

津野創一が『青い海』を総合郷土誌として深化させていった背景には、すでに『新沖縄文学』が文学的・思想的議論の中心を担っていたという状況認識があったと考えられる。文学を核とする専門誌と、生活文化を横断する総合誌という役割分担は、競合ではなく、むしろ相補的な関係として沖縄の文化的公共圏を豊かにしていった。前号で紹介した新川明^{注2}の証言が示すように、『新沖縄文学』が編集委員会を組織し、思想的議論の場として自律性を高めていった一方、『青い海』は大阪創刊という外部性を逆手に取り、復帰前後の揺れ動く社会の中で、沖縄の文化的アイデンティティを再確認するための「共有財」として読者に受容されていったのである。

さらに、上原誠勇^{注3}との出会いに象徴されるように、『青い海』は誌面を超えて人と人を結びつけ、沖縄の美術界に新たな回路を開いた。上原が「青い海ギャラリー」で培った人的ネットワークが、のちに『沖縄現代画家 78 人』へと結実した事実、雑誌が単なる情報媒体ではなく、文化実践の触媒として機能していたことを雄弁に物語る。芸術家、研究者、記者らが行き交う「出会いの場」としての『青い海』事務所の存在は、雑誌が生み出す文化的磁場の強さを示すものである。

1970 年代から 80 年代にかけて、復帰、海洋博、急速な開発と自然破壊、そして「日本化」への揺れが沖縄社会を覆うなか、人々は「ワッターヌ、ウチナードー」という根源的な問いに向き合わざるを得なかった。そのとき、『新沖縄文学』は思想的言語を、『青い海』は生活文化の言語を提供し、それぞれが異なる角度から沖縄の自己像を照射した。両誌の差異は、沖縄文化の多層性を支える二つの柱として理解されるべきであり、その交点には、沖縄が自らの文化を再発見し、再構築していくための豊かな対話の場が広がっていた。

すなわち、『新沖縄文学』と『青い海』は、沖縄の文化的主体性をめぐる異なる問いを担いながらも、互いに響き合い、1970～80 年代の沖縄文化の成熟を支えた双壁であったと言える。両誌の狭間に立ち現れるのは、沖縄が「語りうる主体」として立ち上がっていく過程そのものであり、その軌跡を丁寧に辿ることは、今日の私たちが〈沖縄〉をいかに語り継ぐの

注 2 新川明（あらかわ あきら、1931-）元・沖縄タイムス社長、思想家。新川の出発点として、1953 年 7 月に創刊された『琉大文学』に辿り着く。発行部数が 500 部程度にしかならない大学同人誌であるが、畏敬を込めた伝説的な響きをもって語られる雑誌である。『琉大文学』は 23 年間に計 34 冊、78 年に 4 巻 4 号を出したまま途絶えてしまった雑誌である。編集責任者は 3 巻 7-8 号の場合を例外に、2-4 人から成り、在学期間を反映して、概ね 2-3 号で交代しつつ受け継がれていた。当初のメンバーは 10 人程度であったと推される。『新沖縄文学』（創刊：1966 年、沖縄タイムス社発行）に新川明は、1966 年の創刊期から同誌に深く関わり、「沖縄とは何か」「誰が語るのか」という根源的問いを、文学と思想の両面から突きつけた。アメリカ施政権下の沖縄で、「文学不毛の地」という偏見を打ち破り、沖縄の人々が主体的に書く場をつくるために創刊。1993 年（95 号）に休刊し、2025 年に再び発行される。

注 3 上原誠勇（うえはら せいゆう）「現代沖縄絵画 50 人展」（1981 年 10 月 15 日-31 日）から、沖縄初の企画ギャラリー「画廊沖縄」オーナー。自身も 1977 年に沖縄県展で絵画部門入選を果たす。

かという課題にも直結している。

しかし、創刊から通巻 100 号（1981 年 2 月号）までを視野に収め、初代編集長・津野創一の編集理念と誌面の変遷を歴史的な文脈の中で総合的に捉えるという本研究の目的に照らすと、これまでの検討はなお十分とはいえない。とりわけ、大阪編集期から沖縄移転後に至る特集内容と編集部意識の変化を追跡することは、『青い海』が読者の主体性形成にいかなる影響を及ぼしたのかを理解するうえで不可欠である。

そこで本稿では、1971～1977 年に刊行された通巻 1 号～60 号までの『青い海』から主要と思われる特集記事および編集後記を対象に、①周縁同士の連帯を志向するポストコロニアル的視座、②復帰後の社会的混乱への批判的介入、③沖縄の歴史・文化の再評価、④読者との共同性を重視する編集理念、⑤編集拠点の移動に伴う誌面変容、という五つの軸から検討を行う。これにより、同誌の思想的連続性と文化的実践を明らかにし、続く次号では、『青い海』が復帰期沖縄における文化的公共圏の形成に果たした意義と今後の課題を再検討することを目的とする。

創刊当初から『青い海』は、若者による寄稿文・詩・エッセイを積極的に掲載してきた。「青い海文芸」や「若いひろば」には、進学や就労のために本土へ移住した若者が抱く不安や孤独、葛藤が率直に綴られている。後出の黒島久美「郷里からの手紙」や、シリーズ「働きながら学ぶあなたへ」^{注4}に見られるように、若者たちの語りは、家族との距離、都市生活の困難、故郷への複雑な感情を抱えながら、自己のアイデンティティを模索する過程を生々しく描き出している。津野はこうした声を「生活者の言葉」として重視し、読者の主体形成を支える誌面づくりを志向した。

津野創一は新聞記者・雑誌編集者としての経験を持ち、晩年には推理作家としても活動した。その思想の根底には、「生活者の視点から沖縄を語る」という一貫した理念がある。大阪編集期の誌面には、都市に生きる沖縄出身者の生活実感が濃厚に反映され、雑誌は「移動する沖縄」の文化的記録媒体として機能した。

1 創刊の背景と大阪編集期の文化的実践

『青い海』の創刊地が沖縄ではなく大阪であったことは、単なる地理的偶然ではなく、戦後の沖縄県人会ネットワークや若者の移動史を背景として理解する必要がある。高度経済成長期、大阪には多くの沖縄出身者が移住し、都市部で孤立しがちな若者を支えるコミュニティが形成されていた。

1971 年 10 月号の「沖縄郷土の家」記事は、都市で孤立しがちな沖縄出身の若者をつなぐ試みを紹介している。中野区では那覇市出身の金城唯温氏が、自宅を区の委託で「寄合所」として開放し、新聞の呼びかけに応じた約 60 名が集い、温かな交流の場が生まれた。そこから若者たちの思

注4 あすの沖縄をつくる若い広場『青い海』1972 年春季号（通巻 13 号）：大升敏彦（美東中学校教諭）『定時制のチャイムを聞きながら』（pp.112-114）では、「（前略）新聞報道によれば、本年度全琉で 24,500 人の中学卒業予定者のうち、2,350 人が就職を希望し、そのうち半数以上の 1,377 人が本土就職、983 人が、沖縄での就職を希望している。また高校の場合、16,500 人の卒業予定者のうち 7,000 人が就職を希望し、そのうち、本土に 429 人、沖縄に 2,971 人希望しているという。しかし、求人状況は、本土企業からの求人は多いが、沖縄の企業からの求人は、復帰不安がからみ手控える傾向にありゼロに等しいし、島内就職希望者にとって、大変心配されることと思われます。本土希望からの求人も昨年にくらべると、減少しており、働きながら学ぼうとする人にとっては、いろいろな制約や、条件が重なって、就職先を決定するのに、それ以上に苦労なさることと思います。（後略）」。

いを綴る文集『サバニ』が誕生する。沖縄の小舟の名を冠したこの文集は、彼らの心の航海を象徴するものだった。

翌11月号の「青い海文芸」では『サバニ』特集(pp.150-153)が組まれ、若者のエッセイや詩が紹介された。黒島久美による「郷里からの手紙」には、離島の家族から届く便りを読みながら、東京で働き学ぶ姉の揺れる心が率直に描かれる。懐かしさと温もりに満たされながら、妹からの、ソックスなど欲しいものの「お願いリスト」に困惑しつつ、それでも「また何かあったらお手紙ちょうだいね」と返してしまう。その優しさと葛藤が静かに胸に残る。

こうした文章の掲載は、『青い海』が単なる情報誌ではなく、移動する沖縄人の精神的な拠り所であったことを物語る。創刊当初から誌面には、進学や就労で本土に渡った若者の不安や孤独、家族への思いが綴られ、津野はそれらを「生活者の言葉」として重視し、読者の主体形成を支える場をつくり上げていた。

2 復帰期(1972-1974)の思想的傾向

1972年春季号(通巻13号)の奄美特集^(注5)と同年12月号(通巻18号)の北海道特集^(注6)は、沖縄を「日本の周縁」として位置づけつつ、同じく周縁化された地域との水平的連帯を構想した意欲的な企画であった。とりわけ奄美との関係は、「歴史的にも文化的にも深くつながりながら断絶した関係」と捉えられ、沖縄の本土復帰を契機とした再接続の必要性が強調されている。

奄美特集の巻頭では、沖縄と奄美の相互無関心、さらには「不幸な関係」への懸念が示され、かつて存在した精神的な結びつきの希薄化が問題として提示された。復帰を目前にした沖縄に対し、先に日本へ復帰した奄美が何を語りかけるのか—その問いを通して、両地域が再び手を取り合うための契機を探ろうとする意図が明確に示されている。

続く北海道特集では、奄美特集に寄稿した島尾敏雄の言葉—「北海道も東北もそして琉球弧も等距離で見渡せるような場所から、日本を見たいものだと思う」—が引用される。東京という「地方の文化地帯」から最も離れた北と南、すなわち北海道と沖縄は、歴史的背景も文化的基盤も大きく異なる。しかし、中心から距離を置くという共通の位置性ゆえに、両者はどこか響き合うものを持つ。その視点を踏まえた特集「メッセージ 北海道から沖縄へ」は、地域間の距離を越え、互いの声に耳を澄ませる試みとして編集された。対話という願いは完全には実現しなかったものの、更科源蔵、小笠原克、小野隆祥、宮城高広らが寄せた言葉は、沖縄を、そして日本という枠組みそのものを考えるうえで多くの示唆を与えている。これらの協力は、中心／周縁という固定化された構造を相対化し、周縁同士の

注5 あすの沖縄をつくる若い広場「青い海」1972年春季号
特集 語りかける奄美大島
「琉球弧が歩み出すために」島尾敏雄
「与論島協奏曲」新納重博
【沖縄の史跡】「宮古の古墳のことなど」稲村賢敷
編集後記

注6 沖縄のころ「青い海」1972年12月号(通巻18号)
特集 メッセージ北海道から沖縄へ
「ヤポネシアの北から」小笠原克
「辺境に育つ芽と花」更科源蔵
「北海道で沖縄を研究すること」宮良高広
「わたしの西武門哀歌」加藤登紀子
「スパイにされた女」岡村次郎
編集後記

対話を通じて主体性を再構築しようとする企画の精神を確かなものとした。

3 復帰後の「思想的空白」への応答

1973年1月号^(注7)において白石孝二^(注8)は、復帰後の沖縄社会には「気だるい虚しさ」が漂っていると指摘した。期待された社会変革は実現せず、制度的混乱や価値観の揺らぎが顕在化したことへの危機感が、その背景にあったといえる。

こうした状況を踏まえ、編集部は「沖縄を拓くために」と題する特集を企画し、来阪した評論家・新里金福と、大阪教職員組合前情宣部長・関広延による「対談・沖縄の可能性とは何か」を掲載した。対談では、海洋博や企業誘致を例に、沖縄の政治エリートが示すヤマト志向が批判の対象となる。近代主義を追い求めた結果、アメリカと日本という経済大国から利益を享受するどころか、むしろその狭間で抑圧されてきたという認識が示されている。

議論はさらに、エリートと民衆の隔たりの深さへと踏み込む。高等教育を受けた層ほど「イモとハダシ」と呼ばれる貧困の烙印を恐れる一方で、民衆は十分な教育機会を奪われ続け、その構造的格差こそが革新勢力の支持基盤を形成していると指摘される。また議論は大正期にまで遡り、沖縄学の興隆が日本ナショナリズムの高揚と軌を一にした点にも注意が向けられる。

同号の「随筆」欄(p.26)に掲載された、西平守晴(沖縄関係資料室主宰^(注9))による「混迷する県人会」も看過できない。西平は、本土という異郷において県人会が果たすべき役割の大きさを認めつつも、関西における県会の現状に深い疑念を抱く。二つの近接する県人会は、親睦団体として政治的要素を排するという結成理念を掲げながら、実際には保守と革新に分裂し、意見交換すら行われていない。ある指導者の言を借りれば、両者は「不倶戴天の仇」と化し、共通の場で語り合うことすらできないほど対立が深刻化しているという。一部の頑迷なリーダーによって県人会が断絶し、その将来を憂う声は西平一人にとどまらない。

さらに、西平は本土在住の沖縄県人が〈半沖縄人〉と呼ばれ、沖縄問題への関与を拒まれる状況にも触れる。戦後27年という苦難の時期を、現地を離れ、本土の平和憲法と経済成長の恩恵のもとで過ごしてきた者として、沖縄の「心」を語ることへの後ろめたさがあったのではないかと自省する。むしろ〈大和人〉に近い視点から沖縄問題を見つめてきた側面も否定できず、その点に対する現地沖縄の文化人の憤りには、謙虚に耳を傾けるべきだと結んでいる。

注7 沖縄のこころ「青い海」1973年1月号(通巻19号)
特集 沖縄を拓くために
「対談・沖縄の可能性とは何か」
新里金福・関広延
「気だるい虚しさのなかで」白石孝二
特集 中国と沖縄をつなぐ
「中国の習俗と沖縄地方」窪徳忠
「唐旅 印象記」金城朝夫
「佐敷上城とつきしろの宮」瀬底月城
白石孝二『けだるい虚しさの中で—文化意識についての提言—』
pp.32-37。

注8 白石孝二はペンネームであり、本名は伊礼孝(いれい たかし、1935-2009年)。「いれいたかし」の表記で詩人・文芸評論家として知られ、沖縄の精神文化・風土・民衆思想を深く掘り下げた著作を数多く残した人物である。南島の宗教観や生活文化、さらには戦後沖縄の心性を、詩的感性と批評的洞察を交えて描き出した点に特色がある。主な著作として、いれいたかし『沖縄人にとっての戦後』(朝日新聞社、1982年)、『執着と苦渋——沖縄・レリクトの発想』(沖縄タイムス社、1994年)。などが挙げられる。

注9 西平守晴(1922?-2001年)は、石垣島に生まれ、師範学校進学を機に沖縄本島へ渡った。1942年には本島北部の国民学校で教壇に立つが、翌年に海軍へ召集され、乗艦の撃沈を経験しながらも生還した。戦後は大阪へ移住し、偶然手にした豪華本『琉球建築』を契機に沖縄関係資料の収集を開始する。1950年代から精力的に資料を集め、1970年代には点数が1万件を超え、自宅を改装して「沖縄関係資料室」を開設。研究者・文化人の重要な拠点として広く知られるようになり、1974年には司馬遼太郎も訪問した。生涯を通じて郷土沖縄への深い愛情を持ち、資料保存と後進への継承に尽力した。2001年に79歳で逝去後も、資料室は遺志を受け継ぎ運営が続けられている。

4 社会問題への積極的介入

1973年5月号の特集「復帰元年の始末記」^(注10)では、物価高騰、自治制度の混乱、大学問題、航空会社の経営など、復帰後の制度的矛盾が批判的に扱われた。広田耕司による「内部の条件が外部の力を呼び込み、内部の崩壊を加速する」という指摘は、沖縄社会の構造的依存を鋭く突くものである。

5 文化の再評価とアイデンティティの再構築

① 歴史人物の再照射

1973～1974年にかけて展開された歴史人物特集は、植民地主義的価値観のもとで矮小化されてきた沖縄史を再評価する試みであった。誌面には「沖縄の歴史や習俗をもっと扱ってほしい」という読者の声が寄せられ、雑誌という公共的メディアを通して地域社会の文化的自尊心が着実に回復していく過程が確認できる。

この流れを受けて、1977年春季号「名護の風土と異色人物列伝」^(注11)では、これまで周縁化されてきた人物に光が当てられ、地域史の再構築がさらに推し進められた。とりわけ、ゾルゲ事件の存在を知る者であっても、薄幸の画家・宮城与徳が名護出身であり、事件に連座して獄死した事実を思いを致す者は多くない。宮城の名を沖縄現代史に確実に刻むべきだという認識は尾崎秀樹の尽力によるところが大きい。本誌には甥・屋部高志による記憶——名護蘭社を渡久地政一（元琉球大学教授）らと結成し、展覧会準備を手伝ったというエピソード——も記録されている。

本特集では、名護を取り上げるにあたり、従来の総花的構成から一歩踏み込み、地域固有の個性を浮かび上がらせる企画が志向された。徳田球一、島袋盛敏、宮城鉄夫らの名が挙げられ、彼らこそ「名護マサー（著者注：^も猛者の意）列伝」を形づくるにふさわしい人物群であるとの確信が深まっていた。特集が厚みを得た背景には、津野の旧知である琉球新報社の東一彦、沖縄タイムス社の国吉真永、営業面で支えた比嘉慶一郎や田仲康壮ら、多くの関係者との協働があった。こうした人的ネットワークの結節が、地域史再照射の試みをより豊かなものへと押し上げたのである。

② 芝居・民俗・民謡の再評価

1974年新年号（29号）の特集「よみがえる沖縄の芝居」^(注12)は、復帰後に進む文化的均質化への危機感を背景に、地域文化を主体的に継承しようとする姿勢を示していた。同年12月号（38号）の琉球民謡特集^(注13)では、「観光のみやげ品のように乱造される民謡」への批判が掲げられ、文化の商業化に対する明確な抵抗が表明されている。

注10 沖縄のこころ「青い海」1973年5月号（通巻22号）
特集 復帰元年の始末記
「ヨコがタテになった」嶋袋進
「“大道”すたれてジン（銭）あり」
広田耕司
「沖縄大学問題の核心を衝く」新崎盛輝
「うちなあ芝居おぼえがき」大宜見小太郎
「西洋医術の始祖一仲地紀仁」仲泊良夫
「苦悩する“沖縄の翼”」大城判

注11 沖縄の郷土月刊誌「青い海」1977年春季号（通巻61号）
特集 名護の風土と異色人物列伝
「獄死した薄幸の画家・宮城与徳」
尾崎秀樹
「沖縄農業への情熱・宮城鉄夫」
金城功
「アマゾンでインディオと暮す・島袋盛敏 幸地光男」
「火の巨星・徳田球一」山城善光
「自然界の大王・園原咲也」照屋照和
「詩人の晩年・程順則」上江洲均

注12 沖縄の郷土月刊誌「青い海」1974年新年号（通巻29号）
特集 よみがえる沖縄の芝居
【座談会】「沖縄芝居は生きている」
中今信、上原直彦、宮城嗣吉、森田豊一、仲井真元階
「新たな情念の水路を」中里友豪
「父・伊良波尹吉のこと」伊良波晃
「脚本収録 歌劇「奥山の牡丹」」
【特集レポ】「海洋博延期 その震度を測る いま、沖縄の危機こもごも」
「（新連載・時代小説）北谷王子」船越義彰
「この頃のことなど」比嘉春潮

注13 沖縄の郷土月刊誌「青い海」1974年12月号（通巻38号）
ブロッサム号来琉記① 訳・大熊良一
南大東島・トロッコが走る THE PLAY 三喜徹雄
特集 琉球民謡の世界を探る
「シマウタよ、何処へ行く」上原直彦
「乱世の中の夢と面影」仲程昌徳
「琉球弧における奄美民謡」中村喬次
「新作民謡の今と昔」川田松夫
編集後記

同誌 139 頁の編集後記では、復帰前後の混乱のなかで琉球民謡が抱える問題が次のように述べられている。すなわち、民謡が観光向けの商品としてきらびやかに大量生産され、本来の琉球民謡と呼べるのか疑わしいものが増えているという指摘である。編集部は、民謡の世界をあらためて正面から捉え直す必要性を感じ、この特集を企画したと述べる。民謡は本来、理屈抜きに楽しむべきものではあるが、失われつつある「琉球民謡のころ」にどこかで歯止めをかける必要があるのではないか、という問題意識が示されている。

編集後記は、今回の特集がすべての意図を十分に示し得たとは言えないものの、琉球民謡を身近なものとして考えるきっかけとなり、その本質を見つめ直す素地をつくることができれば嬉しい、と結んでいる。

③ 出版流通批判

1975 年 5 月、編集長・津野創一が沖縄県那覇市に転居したことを機に、編集拠点は大阪から沖縄へと移された。この移動は、誌面の内容と方向性に大きな変化をもたらした。大阪期には「移動する沖縄人」の声が中心であったが、沖縄移転後は地域社会の現場に根ざした文化・政治・経済の問題がより直接的に扱われるようになった。

1977 年春季号^(注 11)の編集後記では、日本の出版流通が中央集権的構造に偏っていることが強く批判され、「小さき者を切り捨てて肥満児になった日本の出版界」と表現された^(注 14)。地域出版社が直面する困難を示すこの指摘は、文化流通の構造的問題を考えるうえで重要である。

編集後記によれば、出版の現場に身を置くことで、日本の出版界の実態が次第に見えてくるといえる。大手中心とはいえ、地方出版社には実質的に流通ルートが開かれていない。月に一冊以上の単行本を継続的に刊行しなければ取次は口座を開設せず、出版計画の段階で刷り部数や内容について伺いを立てることもあるほどである。散発的刊行で売れ行き予測の難しい地方出版社の本が相手にされないのは当然の帰結とされる。

膨大な出版物が氾濫する状況を踏まえれば、こうした対応を「やむを得ない」とみなす向きもある。しかし編集者は「どこかが狂っている」と感じざるを得ないという。沖縄でも例外ではなく、大手取次を通じて全国流通を確保している出版社は存在しない。地方新聞社が独自に築いたルートがある程度である。地方・小出版流通センターの発足により一筋の光明は見えたものの、状況改善にはなお時間を要する。「弱者救済」という語は強者の視点からの言葉であるため好まないとしつつも、「小さき者を切り捨てて肥満児になった日本の出版界」には弱者を支える意思が見られないと批判する。

それでも、大手取次のルートに乗らず、地域の人々とともに生き続ける

注 14 1970 年代の出版流通は、大手取次による寡占的・中央集権的構造が極めて強く、小規模出版社は構造的に排除されやすい状況にあった。鈴木親彦『出版を巡る流通と文化』では、1970 年代の雑誌流通改革（発売日論争）を扱う中で、取次が「売れる見込みの低い出版社」を排除する傾向が強まったことが示唆されている（第 4 章）『雑誌流通改革に見る衝突と協力』p.69。

出版物は多い。その数が多く、地域に根ざした声が強ければ強いほど、地方の人々はより“健全”な方向を志向するのではないか——編集者は、夜を徹して作り上げた小さな単行本『伊江島旅情』^(注15)を手にしなが、
そう思いを巡らせている。

注 15 『おきなわ伊江島旅情』監修：伊江村（沖縄県）シリーズ：ハンドブック・島シリーズ、青い海出版社、1977年4月。

④ 読者との共同性の深化

『青い海』の編集後記には、「叱責をお待ちしております」「ご意見をお寄せください」といった呼びかけが繰り返し記されており、読者とともに誌面をつくろうとする一貫した姿勢がうかがえる。読者と執筆者が交差する欄「三叉路」^(注16)もまた、個々の経験や記憶が語られることで、雑誌と読者が協働して文化的記憶を編み直す場として機能していた。

注 16 沖縄の郷土月刊誌「青い海」1974年12月号（通巻39号）「三叉路 読者から 執筆者から 編集部から」p.138。

投稿者の久志美紗子は、前号に掲載された伊波南哲の随筆を読み返し、そこに登場する三河島の泡盛屋や国吉真栄の人物像に触れながら、自身にはその土地にも人物にも心当たりがないと率直に述べる。それでも国吉について、「人生の途上で誰もが抱く退屈や虚無を受け止めるような、飄々とした人物だったのではないか」と想像をめぐらせる。そして、語られた話が「面白半分」だったのか、あるいは誰かから聞いた話を伊波に伝えたのかもしれないと前置きしつつ、次のように記す。

とにかく、面白い事を聞かせて頂き古きよき時代を思い出すとともに、
すっかり変わってしまった東京の街、沖縄、或は昔旅した事などくつつけて、その変貌しているさまに、年のせいか砂を噛むような味気な
さを感じます。

この証言は、「三叉路」が単なる投稿欄ではなく、読者と雑誌が互いの記憶を媒介に文化的風景を再構築する、きわめて能動的な共同空間であったことを鮮やかに示している。

結論. 1971～1981年の『青い海』の思想的連続性と文化的意義

本稿は、1971～1981年の『青い海』を、復帰期沖縄における文化的公共圏の形成に寄与した地域メディアとして再評価した。その思想的特徴は次の四点にまとめられる。

① 周縁同士の連帯を志向するポストコロニアル的視座

奄美・北海道・琉球弧との対話を通じ、中心／周縁の構造を相対化し、沖縄の主体性を再構築した。

② 復帰後の社会的混乱への批判的介入

政治・経済・大学問題・出版流通など制度的矛盾を積極的に取り上げ、公共的議論の場をつくり出した。

③ 沖縄の歴史・文化の再評価と自尊心の回復

歴史人物、芝居、民俗、民謡、やちむんなどを取り上げ、文化的アイデンティティの再構築を図った。

④ 読者との共同性と生活者の視点を重視する編集理念

若者の声をすくい上げ、読者とともに未来を構想する場として機能した。

創刊地・大阪から沖縄への編集拠点の移動は雑誌の位置づけを変化させたが、津野創一の理念は一貫して「生活者の視点から沖縄を語る」ことにあった。『青い海』は、復帰期の社会・文化の再編の中で地域の主体性を問い直し、周縁からの知を発信する重要なメディアであった。その思想的基盤は、今日の沖縄発の雑誌文化にも受け継がれており、地域メディア研究において再検討すべき意義をもつ。